
武器の重さ

ルイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武器の重さ

【Nコード】

N1286BA

【作者名】

ルイ

【あらすじ】

全身に傷を負い血を流しながらもその目は意思を持ち右手に敵から奪った刀を持って向かって来る敵を切る。彼以外の味方は既に全員が死んでおりまた、彼もその命は既に尽きかけていたが彼はただ主君の為にとその歩を前に前にと進んでいた。

全身に傷を負い血を流しながらもその目は意思を持ち右手に敵から奪った刀を持って向かって来る敵を切る。彼以外の味方は既に全員が死んでおりまた、彼もその命は既に尽きかけていたが彼はただ主君の為にとその歩を前に前にと進めていた。

劉璋は子供の頃から優しい性格で父親の劉焉から益州を受け継ぐと直ぐに自分の所に住む民は全員が笑顔で居て欲しいと思いつく政策を全て行ったが、彼の行う政策はこの時代には早すぎ部下にも文官の王累以外には理解されず思うように進まず。逆に彼の行う政策で利を失う商人や地方の豪族に邪魔をされ民には不満を持たれてしまう状況になった。それでも劉璋は諦めずに彼の政策を理解し彼の思いを叶えようとするとする僅かな部下の張任や王累と共に頑張ったが

「全く劉璋様は!!!!」

「桔梗、言葉に気をつけなさい。」

陰で殆どの部下が彼のことを無能と罵り蔑んでいた。酒を飲みながら愚痴を言っている女性二人も劉璋の無能さに辟易していた。

紫色の髪に紫色の着物に胸元を強調した服を着ている女性黄忠。その美貌と弓の腕前から部下だけでなく自分の治めている城の民からも尊敬されている。

青色の髪に青色の着物に腰までのスリットが入った服を来ている

女性厳顔。その美貌と男っぽい性格でこちらも兵と民に尊敬されている。この二人の女性も

そして、彼の政策に不満を持っていた部下の趙？は遂に反乱を起こす。不満を持っていた民の心を利用して益州内の豪族と手を組み更には蜀郡・広漢・？為の三郡も手を貸して一気に成都を目指した。これに対し劉璋は予期していなく後手を踏み窮地に陥った。他の部下達が劉璋の援護を消極的だったのに対し。

張任とその部下達は報告を聞くと直ぐに成都に向かい。反乱軍を押し止めその進軍を止めた。劉璋は張任に

「心。感謝する。軍を任す」

「解りました。劉璋様」

劉璋はただ一人自身を助けに来た援軍の早さとその忠誠心の高さに報いようと自身の軍の指揮を任せた。張任は自分が有効な作戦を立てる事も効果的な軍の展開も出来ないことを理解していたのでただ一言。

「出る」

その一言のみで反乱軍に突撃し味方の誰よりも前に出続けた。味方の兵はその背中に絶大な信頼を寄せ。敵兵はその姿に怯え続けた。彼は劉璋の事を裏切る反乱軍に容赦は無かった。劉璋からは降伏する兵は許せと言われていたが、彼の優しさを理解できずその優しさを受けながら彼を無能と笑う者達を許せなかった。故に彼は敵兵達を切り続ける。降伏する者も逃げる者達も。彼はこの反乱で守護者と呼ばれ民や味方の兵から絶大な信頼をよせられた。そして、蜀の武将達は彼に劉璋の悪口を聞かれる事を恐れ彼の前では絶対に悪口を言わない様にした。

「心よ。反乱をよく退けてくれた。しかし、降服はいなかったか……」

「劉璋様……申し訳ありません」

「構わん。私の力不足よ。5年掛かって少しずつ政が上手く行き始めている。心よ……私に最後までついてきてくれるか？」

「私の主は劉璋様のみ。劉璋様に最後まで付き従うのが私の望みです」

反乱を張任の活躍で退けた劉璋はその後も全ての民の笑顔が見たいと政策を進め。部下達も文官は王累が時間をかけて政策を教えた事により少しずつ理解をしこのまま進めれば1〜2年で効果が出るまでになった。劉璋達は喜び。劉璋は民達の喜ぶ顔が見れると喜び。部下達は劉璋がこれで認められると思い。一層に頑張った。

「劉璋様!!!これを!?!」

「!?! 張肅よ。これは真か?」

「はい……兄が」

「そうか。劉備を引き入れると申すか。ここまで内容の手紙なら他の者達も大勢居そうだの」

「劉璋様。迎え撃ちましょう。ここまで来て．．．．．ここまで頑張ったのは劉璋様です。あの者達は何もしていません!！」

「いかん!?ここで戦を起こせばまた民は疲弊する。今回は前の反乱とは違う。前は政策の先が見通せないのでもやり通す為に戦をしたが今回はもうここまで進めば劉備に任してもよい」

劉璋は笑顔でそう言い。戦の準備を認めなかった。劉璋は本気で全ての民を救おうと思いつた。その為に行動しているのを間近で見ている張任は許せなかった。反乱が起こった時も敵味方問わず死んだ兵の家族の生活を面倒見るように指示をし死んだ兵の名前を書留。町の孤児や犯罪者達すら助けようとし。そのお陰でまた政策が遅れそれでもまた笑顔の民が増えたと喜びそうやってゆつくりと進めた政策がやっと実を結ぶようになったのを本当は悔しいのをそれでも民の為にこのまま降服しようとして劉備を待つ劉璋を張任は黙って見ている事が出来ず。

「王累。私が出ます。貴女は死なないで下さい」

「張任!?貴方一人で勝てません。劉璋様を説得したほうが!？」

「駄目です。劉璋様は民の為に戦をする気も無いし他の武将達も天の御使いと劉備に降るでしょう。ですが私は劉璋様以外に降る気はありません。それに劉璋様の無念の気持ちを晴らしたい。だからこの後の劉璋様の事任せました」

「死ぬつもりですか?貴方は勝手に死ぬつもりですか!?!なら私も」

「貴女が死ねば誰が劉璋様を?貴女がいるから私は出れる。任せま

したよ」

張任は城に帰ると民を逃がし兵も死を覚悟した者以外は逃がそうとしたが張任の城に居た兵は全員が張任に着いていった。部下達はあの反乱の後から全員が張任に心酔しその張任が心酔している劉璋にもまた命をかけるつもりでいた。

劉備が城に迫ると張任達は城の前に陣を敷き劉備達を待ち構えた。

「張任さん！？私達と一緒に民の為に力を貸してくれませんか？」

「張任よ。あやつに尽くすのはもうやめろ。御館様は立派な方じゃ」

「張任。桃香様に一緒に尽くしてくれないかしら？」

「張任さん。俺と桃香に力を貸してくれないかな」

口々に降れという劉備軍に張任はただ一言のみ。

「進め」

その小さい一言は全ての人に聞こえどれだけの怒りが込み上げられているのか敵味方の陣営は本能で理解した。張任は右手に槍を持ち三千の兵の先頭に立って突撃した。

張任とその部下は戦意が高く劉備軍と互角以上に戦った。死ぬ時

も相手を道連れに死ぬか相手の体を掴み自分と一緒に味方に突かれて死んでいった。その戦闘に敵兵を本能で恐れた。劉備軍にはこんな戦闘等今までしたことが無かった。今まで戦闘はしても敵兵は劉備と天の御使いの魅力により民の為にと降服するのがほとんどであったのが敵兵は憎しみの目で睨み死ぬ時も道連れにされるのは初めてであった。

いつの間にか劉備と天の御使いは後退していた。

「鈴々が相手なのだ！」

張飛は張任を止めようと蛇矛を突きながら叫び、その小さな体からは想像もつかない攻撃を繰り返して出し苛烈に攻めるが張任はその攻撃を全て右手の槍で防ぎきり逆に右手の槍を下から振り上げて張飛の蛇矛を弾き振り上げた槍の反動を利用して振り下ろして張飛の小さな体を吹き飛ばした。

「軽いな。張飛、貴様の攻撃は軽い」

「鈴々の攻撃は軽くないのだ！！皆の思いを乗せた攻撃が軽い訳無いのだ」

その言葉と同時に先ほどよりも鋭い攻撃を張任に繰り返すがその全てを受けきり更に。

「皆の思い？ふざけているのか？何故皆の重いが乗る？私の槍には主の思い以外乗せる余裕も気も無いが。だから貴様の攻撃は軽い。皆の思いじゃなく貴様の主の思い全て攻撃に乗せよ。私達が乗せるのは皆の思いじゃない。戦う事が出来ない主君の思いだ。戦えない主君の為にその思いを武器に載せて戦うのだ。」

貴様に解るか？

無理と解つても全ての人を救おうとした気持ちだ。自分の才能が無いと嘆きながらもそれでも叶えようと足掻く思いだ。救った民から無能と蔑まれる気持ちだ。政を理解できない部下から無能と嘲笑れる気持ちだ。人が死ぬ度に悲しみで毎晩悪夢に魘される気持ちだ。それでも理想を叶えようと．．．．．やっとなげられる時にそれを奪いに来た者に民の為にならぬと悔しさと無念の気持ちを飲んだ気持ちだ。そんな主君に何一つする事が出来ない気持ちだ！！」

その叫びに劉備軍の足が止まり黄忠と嚴顔の顔は凍りつく。そんな中に張飛だけは動き。

「でも、ここに来るまでの村でおじいちゃんやおねえちゃん達は泣いてたのだ！笑顔をしたいのに悲しませたら駄目なのだ。」

「これから良くなると。やっと先が見えたのに。貴様達が劉璋様の思いを！」

「今生きている人たちも笑顔にしないと駄目なのだ！！」

「そんな事は解っている！それでも必死にやってきたのだ。後少しで。後少しで．．．．．こんな時代じゃ無ければ．．．．．天が主の才能に嫉妬しこの時代に生まれましたのだ。霸王が名君と呼ばれ温厚で仁愛に満ちた劉璋様が暗愚等と．．．．．」

張任と張飛の戦いは激しさを増しお互いに傷を負い切り傷から血が流れ武器を構える手は血で真っ赤になりながらもお互いは叫びながら攻撃を繰り返していた。

しかし、軍単位では張任達はその兵数の差からどんどんと死人を

だし。気づけば張任だけになった。だが誰一人降服をせずその全てが死ぬまで戦いその恐怖を劉備軍に刻み込んだ。

「張任さん。降服して下さい！！私にその力を貸してください。劉璋さんもそれを望んでるはずですよ」

「張任さん。俺達に力を貸して下さい」

「私の主は劉璋様のみ。どうしてもして略奪しに来た軍に降る事が出来ません」

傷だらけでもそうはつきりと言い。張任は槍を構え愚直に前に進みその姿に兵は怯み張飛槍を突きつける。

「張飛。私の槍は重かったか？」

「重かったのだ。．．．．． 鈴々の攻撃はどうなのだ？」

「最初の頃よりは随分重くなった。」

張任は笑いながら槍を降ろし、張飛は目に涙を溜めながら蛇矛を張任の体に突き刺して張任軍と劉備軍の戦争は終わりを迎えた。

劉備軍はそのまま成都へ向かい劉璋は降服し劉備は蜀の王となった。その時に王累から資料を受け取った諸葛亮はやつと先が見えたという意味を理解し、蜀の政策を劉璋の進めた物をそのまま受け継ぐべきと進言し劉備もそのまま進めるようにした。

張任の死体と共にその死亡を知らされた劉璋と王累は

「心よ。今までよく余に使えてくれた。後は休め」

劉璋は言葉をかけ、王累はただ目に涙を溜めるのみで唇を噛み締めその場から去って行った。

その後、蜀は三国同盟を形成し、蜀の民は笑顔で溢れ、五胡の脅威も三國で挑み退け、蜀の脅威は無くなり。

「王累よ。許す」

劉璋は彼女にその言葉を送り、自室に帰り、彼女はそのまま劉備に暇を貰い、そのまま蜀から消えた。

劉璋はその知らせを受けて笑い、蜀の民が笑顔に溢れているのを満足げに息を引き取った。

(後書き)

本当は劉璋や劉禪って優秀じゃと思って劉璋を優秀にした張任主人公を少し書いてみました。

連載見たい人が居ればもっと中身を詳しく書き連載にしてみようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1286ba/>

武器の重さ

2012年1月3日04時00分発行